

# 2020 年度イラク・小児がん支援事業支援報告



■実施地域：イラク共和国クルド自治区

■支援対象者：小児がん患者、患者家族、貧困患者家族

## 概要

2020 年度の支援 2020 年度は新型コロナウイルスの感染拡大により、イラクでは外出禁止令の措置が取られ、小児がん患者とその家族を取り巻く状況は例年以上に厳しい年となった。治療のための外出許可は現地当局から出るものの、ナナカリ病院では新規外来の受入停止や感染を恐れて来院を控える患者が見受けられるなど病院側もイレギュラーな対応が多い年であった。そんな中、JIM-NET では現地駐在員が現地に帰任できない時期も長く続いたが、リモートワークで現地スタッフと連携を取り、一部実施することができないプロジェクトもあったが、概ね計画通り支援を実施することができた。

## 1. 貧困患者支援・病院への医療支援及び医薬品提供

月 3,000USD の予算で、病院側からの要請を基に、抗がん剤やがん治療に必要な医薬品を購入し、病院に納品した。本来病院に在庫しておくべき医薬品（特に抗がん剤）が不足している時期に合わせ、臨機応変に対応している。

貧困患者支援では、月 1,000USD の予算の中で、病院に在庫していない抗がん剤や医薬品を外部で購入するための支援及び病院に通院するための交通費支援として行なっている。支援の需要が非常に高く、毎月の予算も 5 日間も持たずに使い切ってしまうことが多い。多くの患者家族に平等に支援が行き届くように調整をしているが、2020 年度はコロナ禍で困窮する患者家族も多く、支援が追い付いていないのが現状である。貧困患者の状況が逼迫していることに鑑み、2021 年度は予算を増やし対応していく。

## 2. JIM-NET ハウスにおける心理社会的な支援

コロナ禍で都市間の移動が禁止される中、JIM-NET ハウスでは患者やその家族が安心して治療を受けられる場を提供し続けることができた。6 部屋ある宿泊部屋には年間一日平均 9.44 人を受け入れ、近くのホテルやモーテルを利用するか病院内のベンチで寝泊まりせざるを得ない患者家族にとっては、経済的、身体的、精神的な支えとなっている。院内学級はコロナ禍で閉鎖していたが、閉鎖している間も先生が病室を訪れ、感染症対策や勉強を個別で教え、子どもたちへの教育を止めないよう努めた。11 月からは長い間中断されていた院内学級も感染症対策を強化しつつ再開された。勉強だけでなく、絵や歌を通して子どもたちの心のケアにも取り組んだ。院内学級を通じて、治療を受ける子どもたち同士の交流の機会も多く生まれている。患者家族へのカウンセリングについては特別なケースを除き対面ではなく窓越しで行い、感染症対策を図りながら実施した。

## 3. 学校での啓発活動

新型コロナウイルスの影響で、実施することができなかった。2021 年度も実施は難しいと判断しているが、引き続き教育局との連携は取りつつ、再開のタイミングを探っていこうと考えている。



感染が拡大し始めた6月、院内学級は閉鎖となったが、先生方が入院してる子どもの部屋で個別に教育の機会を提供し続けました。



コロナ禍においてもがん治療を止めるわけにはいきません。病院側との調整でその時に必要とされる医薬品を今年度も支援しました。



子どもの体調に留意しながら、外で遊ぶことも。子どもたちは室内でのアクティビティとは違う表情を見せてくれます。



11月からは感染症対策を講じながら院内学級が再開されました。治療のため遅れてしまった勉強を取り戻せるように、子どもたちも先生も必死です。



白血病の治療を続けていたイマーンは院内学級でも学んでいたキルーク出身の女の子。12月にがんが再発、1月に10歳でこの世を去りました。



日本の支援者さんが送って下さった折り紙の鶴を、院内学級の子どもたちと先生で大きな一羽の鶴に変身させました。